
その名は『めるへん』return ~ 白馬と哀の一日 ~

楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その名は『めるへん』return(白馬と哀の一日)

【Nコード】

N7150B

【作者名】

楓

【あらすじ】

ますます賑わう『喫茶めるへん』。どういう因果か臨時バイトに励むこととなった某少女は、周囲の視線も何のその、淡々と仕事をこなして過ごしてます。そして今日もあの男が現れた——その名は『めるへん』の続編です。『一日シリーズ』です。哀嬢小5設定。今回、前作のノリではなく至って真面目です。白+哀or白哀です！蘭ちゃんと園子さん、オリキャラも登場しますので苦手な方はご注意下さい シリーズ一貫哀嬢至上。カプ不特定なので都度明記してます。 以上、宜しくお願い致します(＊＼／＼)

1 惚れられたが 不祥ですよね 赤ずきん（前書き）

今回は至って真面目な（ハズの）お話です。前作とは雰囲気違ってます宜しくお願い致します（＜人＞）

哀嬢至上 or 白哀がダメな方は申し訳ございませんがリターンお願い致します（＜人＞）

1 惚れられたが 不祥ですよね 赤ずきん

「うわぁ凄いい混雑ぶりね」

「でっしょ？」

うふふと得意気に胸を張る親友の言葉に蘭は素直に頷き、インテリアの凝った明るく広々とした店内を見渡した。ヒラヒラの可愛らしい制服を身に纏った女の子達が、忙しそうに且つ可憐に動き回っている。

「しかも制服すつごく可愛い！園子もこれ着てるんでしょ？素敵じゃない！……けどこのお店、女の子の通う様なお店っぽいけど、男の人も結構いるんだね」

「うーんそれはここ最近なんだけどね」

「そうなの？」

案内された席につき店員が差し出してきた黒表紙のメニューを受け取りながら、蘭は不思議そうに首を傾げる。『それより何食べる？オススメはねーコレとコレとねー』と身を持ち出して来る園子に、

蘭も一緒になってメニューを覗き込み驚く。普通の喫茶店では有り得ないくらい、種類が多く専門的だ。目移りしてしまい、なかなか決められない。オーダーを聞きにきた店員に『まだ迷ってるんで』と謝り、一旦下がってもらった。

カランカラン

響きわたる軽やかなベルの音に二人が何気無く顔を上げると、一人の青年が大きな木製の扉を開けて入って来るところだった。

スラリと背が高く、柔らかそうな茶色の髪に端整な顔立ち。焦茶のスーツにストライプのシャツを合わせ、ノーネクタイ。そのことなく上品でスタイリッシュな姿に、自然と目が惹き付けられた。

「あれ……？あの人確か……」

「え？蘭知ってるの？」

「うん……確かお父さんと同じ探偵だったと思うんだけど……」

『いらつしやいませ』と店員が小走りで近寄り、頬を染めて席まで案内しようとする。青年は微笑みながらも柔らかな物腰でそれを断り、慣れた様子で店内を横切りカウンターの端に座った。

「アラ白馬ちゃん、いらっしゃい！今日も一番乗りねー毎日お疲れさま！」

につこり明るく『白馬ちゃん』と呼ばれた青年は、微苦笑を漏らしながら片手を上げる。

「こんにちはオーナー、今日もいらっしゃってたんですね。オーナーの方こそ、こう毎日だと大変なのでは？」

「そーなのよー今までは週末だけ様子見に来る程度だったんだけど、最近忙しい上に人手が足りないじゃない？」

白馬は、ほぼ全席埋まった店内を見渡し『……確かに』と頷く。オーナーの隣で黙々と大皿を磨いていた大男が、水の入ったグラスをカウンター越しに置き、低い声で話しかけてきた。

「……今日は何に」

「あ、では今日はダージリンティーで」

「……ストレート？」

「ええ、勿論」

大男は無言で手を動かし、程無くしてカウンターの上には薔薇をあしらったデザインのティーカップとソーサーが置かれる。一目見て白馬は苦笑する。

「ヘレンドですか。オーナーも好きですね」

「トーゼン！喫茶店は外装も内装も勿論食器もゼンブ可愛くなくっちゃ！」

その断固とした口調に、白馬は自然と口元を綻ばせながら優雅にティーカップを持ち上げる。一口含み、軽く目を見張る。

「……セカンドフラッシュ。色も香りも申し分ない。日本の喫茶店でこれほどの茶葉と技術に出会えるとは……流石ですねマスター」

「……………」

マスターと呼ばれた大男は、カウンターの隅で再び黙々と大皿を磨き始めている。

「フフ……照れてるのよコイツ」

「ハハハ、マスターらしい。この色合いと味だと、水にもこだわってますよね？」

「わかる？白馬ちゃんも通よね」アリスちゃんったら『この茶葉にはこの水の硬度』とか妥協しないからアタシも大変でさあ」

「…………オーナー。その名前は呼ぶなと何度言ったら」

頬に手をあてて嘆く振りをするオーナー。その傍でうつ向くマスターの手に握られていた高級そうな大皿が、ミシリと音をたてる。二人の妙な遣り取りに、白馬は思わず吹き出し笑った。

カウンターで交わされる三人の会話を聞くともなしに聞いてしまった二人は、顔を見合わせ小声で囁きあう。

「…………園子、あのオーナーさんって、男の人よね？」

「あーそうなのよ」初対面の相手にはちゃんと男言葉なんだけど、

馴染んでくると本性出てくるみたいでさー」

カウンターに呆れた視線を向けながら、園子は『この店の趣味もぜえゝんぶオーナーの趣味だしねー』と頬杖について苦笑する。蘭はあらためて、にこやかにオーナーと言葉を交わしている青年をそつと窺った。口元を左手で隠しながら囁く。

「ね、あの人、いつも一人でこんな可愛らしいお店に来るの？もしかしてそんな趣味があるとか……」

「蘭の気持ちもわかる！あんなイイ男なのに傍から見たら正直アヤシイわよね！でも残念ながら違うのよ、あの人が来るのはね……」

「——いらっしやい。お決まりかしら？」

「あ、すいませ………哀ちゃん！？」

淡々とした澄んだ声と水の入ったグラスを置く音に顔を上げると、そこにはまるで物語からそのまま抜け出てきたかの様な装いの哀が佇んでいた。

左腕に銀のお盆を挟み、右手には苺のマスコットがぶら下がったピンク色のペンを持ち『ご注文は？』と問いかけてくるその姿に、蘭は啞然とする。園子がニヤニヤしながら片手をあげた。

「お勤めごころー」

「……………あなた私に助っ人なんて頼んでおきながら、自分は今日お休みってどういう事なのかしら」

「まーまー！仕方ないじゃない私も7連勤だったのよーこの私が7連勤！世の中のイイ男達が待ちくたびれて逃げちゃうじゃないの！カワイイ制服には憧れたけどさすがに疲れちゃったわよ！———ところでソレ。そのカツコ。今日もまた制服着替えたの？」

「……………着替えたんじゃないくて着替えさせられたの」

「ホントだ、哀ちゃんだけ制服が違っね」

苦い顔をして嘆息する哀の言葉に、蘭は広い店内を見渡した。他の店員達は黒のメイド服を身につけているのに、哀だけは赤いメイド服———いや、少しデザインが違う様な気がする。園子が哀の制服に上から下まで目を注ぎ、口を開く。

「ねーそれって赤ずきんちゃん？」

「……………そうみたいね。全く悪趣味だわ」

「悪趣味ってどうして？凄く可愛いし似合ってるよ？」

「うんうん、くやしーけど確かに」

二人はもう一度、哀の全身をじっくり眺める。

真っ赤なミニワンピース。

上半身は身体にぴったりしたデザインで、スカートの裾は三段フリル、その裾からは何重もの白いレースが覗いている。膨らんだ袖口からは哀の白く華奢な腕が伸び、肩からは赤ずきんちゃんの代名詞『赤い帽子』の代わりに白いボンボン付きの赤いケープを羽織っている。そこに真っ白なフリルのエプロン。赤ずきんちゃんファッションのオプシヨンののか、左腕で小さな籠を持っている。

客観的に見て可愛い。凄まじく可愛い。『狼になりたい！』……と
思っている店内の男達が数多くいるのか、よくよく周囲を窺うと大
多数の視線が彼女を追っているのが分かる。

しかしこれはもはや普通の喫茶店では決してないのでは……と蘭は
密かに疑問に思う。

「哀ちゃんがどうして悪趣味って言うのかわからないけど……本当
に似合ってるよ、大丈夫！」

「……………わからないのならいいの別に」

安心させようとする蘭の言葉に、哀はかすかに自嘲して顔を伏せた。

「何だかよくわかんないけど……まあオーナーの趣味とはいえホント
ト災難ね〜今日が最終日だから我慢よ我慢！そうだ今日ココに来た
のは蘭がこの店を見てみたいって言ったせいもあるけど……………」

園子は隣の椅子に置いていた鞆を引き寄せ、なにやらゴソゴソ探している。すぐに見つかったのか、取り出したモノを哀に手渡した。

「はいコレ。約束のモノ」

「園子、なにそれ？」

「んふふー内緒よ！ナ・イ・シヨ！」

哀の手の平に置かれた小箱を、蘭が不思議そうに見つめる。一見何の変哲もないその四角い物体を哀は胸元に引き寄せ、しばし黙視する。そつと顔を上げて、園子に向かってかすかな微笑を浮かべた。

「……………アリガト」

二人から手早くオーダーを聞いて、スカートの裾をひらひらさせながら哀がカウンターに戻って行く。その可憐な後ろ姿を他の男性客同様視線で追いながら、園子は少し驚いた口調で話す。

「……………あの可愛げないガキンちょも、あんな顔して喜ぶのねー。カワイイトコあんじゃん」

「ねえ何なのよあれ。気になるじゃない」

蘭の言葉に、園子はうーんと腕を組みつつ唸る。

「私達が持っていて意味のないモノ？——と言っても、詳しくは私も知らないのよねー。だって内容読んでも私にはさっぱり良くわかんなかったし」

「ちよつと園子……まさか怪しいモノじゃないわよね？」

「あははーその点は正直ちよつぱり自信なかったりして。ま、あのコだったら平気でしょ！なんとかなるなる！」

「もう！園子ったら！」

蘭は疑いの眼差しで園子を軽く睨み、園子はいつもの調子で胸を反らし笑う。そうこうするうちに二人の話題は次々に変わっていき——「つら若き彼女達の明るい口調と笑い声が、『喫茶めるへん』の心地よい雰囲気溶け込んでいった。

1・惚れられたが 不祥ですよね 赤ずきん（後書き）

『惚れられたが不祥』 惚れられるのも前世から定まった不運であり、気が乗らなくてもあきらめるしかない意味の諺。

今回は某探偵の蘊蓄^{ウンチク}が長くて（笑）哀嬢との絡みまで辿り着けませんでした（；^_^）A某探偵と哀嬢との関係は、他とは一風違います↑my設定。次回はらぶらぶの予定（当社比）。男前の彼を目指します。

読んで頂き有難うございました（*^_^*）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150b/>

その名は『めるへん』return～白馬と哀の一日～

2010年10月14日16時03分発行